

編集委員が



行く

『スポット就労』で、 個性ある自己実現をめざす

—のどかな田園風景と、ひかりのさとファームの豊かな就労支援の取り組み—



近ごろ、何かと元気な中部圏。気候温暖な知多半島の根元に位置する東浦町。その緩やかな丘陵地に、自分らしい働き方を模索する知的障害者通所授産施設、ひかりのさとファーム（青山誠施設長）がある。秋の長雨を予感させる九月の中旬、刈入れを待ったんぼと鶏舎の広がる同施設を訪ねた。

最寄りのJR武豊線「緒川駅」に降り立った筆者らを、明るい笑顔で迎えてくれたのが、同施設就労支援担当（ジヨブコーチ）の田口絢子さん。巧みな運転でワゴン車を操るあたり、就労支援の実践経験の豊富さとフットワークの良さを、まず実感した。一〇分ほどの移動距離だが、「この道の奥にグループホームがあり、そこから利用者の皆さんが通っているんですよ」と、施設が近づくにつれ、利用者の方の日常生活圏が見えてくる。

ほどなく、田園風景に点在する施設のうちのひとつ、ひかりのさとファームに車は吸い込まれた。

個性に応じた自己実現

障害者自立支援法によって、障害者福祉施設は大きな転機を迎えようとしている。本年の一〇月から概ね五年間をかけて、従来の授産施設は、就労移行支援、就労継続支援A型、同B型等の新しい事業体系へ移行する。就労関係の訓練等給



社会福祉法人愛光園 ひかりのさとファーム

〒470-2102 愛知県知多郡東浦町字大緒川字下米田37
TEL 0562-84-4151 FAX 0562-84-4413

本誌編集委員 埼玉県立大学保健医療福祉学部助教授

朝日雅也

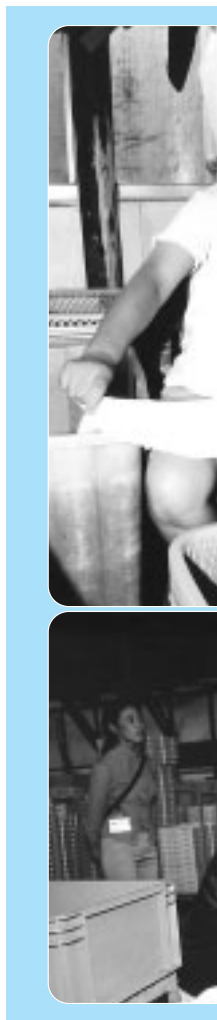
付だけでなく、介護給付の生活介護、あるいは市町村による地域活動支援センター等への移行も考えられる。もちろん、施設の機能を明確化して、一般就労への移行や工賃のアップをめざすことは大事である。

ただ、気になるのは、制度やサービスを提供する側の都合で、障害のある人の働き方が決められてはしまわないかという点。障害のある人の就労の原点を探れないかと思っていた矢先、ひかりのさとファームのホームページにあった「個性に応じた自己実現」という言葉が気になった。

働くことを通じて 豊かな地域生活を

ひかりのさとファームの事務所は、木の香りが漂う平屋建てで、作業場とともに一体化された和風の概観は、田園風景に見事に溶け込んでいる。あいにく施設長は不在だったが、前出の田口絢子さんと、同じく就労支援担当（ジョブコーチ）の鈴木慶子さんが施設の概要を語ってくれた。

ひかりのさとファームの運営主体は、



社会福祉法人愛光園（日高幸子理事長）である。一九六五（昭和四〇）年に、隣接する大府市共和町に重い障害のある子供たちの通園施設を開設、その後の一九七三（昭和四八）年に法人の認可を受けた。同じ敷地内に、身体障害者療護施設、知的障害者更生施設、身体障害者福祉ホーム、介護老人保健施設等があり、「ひかりのさと」を形成している。その他にも知多地域生活支援センター「らいふ」、障害者就業・生活支援センター「ワーク」ほか、児童短期入所事業、知的障害者短期入所事業、職場適応支援者による支援事業など多様な事業を展開している。

「重度の障害のある人も受け止め、その地域生活への移行を支援していく」のが当初からの法人の理念である。入所施設から地域へ、グループホームを順次設置することで、「住まいの場」について一定の成果をみた。ところが、地域へ移行したときに、居住の場だけでは足りない。昼間の行き場を求める活動が、ひかりのさとファームの原点になっている。

グループホームが増えていくにつれ、施設を出て行く利用者の「働き方」を提示する動きが始まり、一九九二（平成四）年に愛知県の心身障害者小規模授産（補



ひかりのさとファーム就労支援担当の田口絢子さんと、知多地域障害者就業・生活支援センター丹下靖就労支援コーディネーター

助）事業を受け、前身である小規模作業所が設置された。作業活動は、養鶏事業部とパン工房事業部。グループホームとより高い給与支給をめざす小規模作業所で、就業・生活支援の一体的システムが動き出した。

ひかりのさとファームは、一九九九（平成一一）年四月に開所。基本理念は、「働くことを通じて、どんなに重い障がいを持っていても、かけがえない人として個性的な自己実現の場を目指す」「自律を尊重して、豊かな地域生活を送り続けられるよう就労支援と、より多くの給与支給を目指す」。

施設やグループホームを利用する仲間が新しい仲間「街で暮らすことの良さ」を伝えるピア・カウンセリングなどの取り組みにより、自ら地域生活を選択する



れすとらん くるみ



「れすとらん くるみ」での食器洗い

人が増えてきたという。

ひかりのさとファームの運営・援助方針は、次の三つ。地域での自立生活をめざす人への収入保障として、グループホーム等に暮らす人が障害者基礎年金等と合算して、月額一〇万円以上になるように努力すること。

「選択できる」個別支援体制として、①働く環境の整備、②働く情報をわかりやすく、③働くことを通しての社会参加、自己実現を図ること。

特別の支援を必要とする人への援助スキルの向上。具体的には、自閉症の人、行動上の障害のある人に対する、TEACCHプログラムやジョブコーチ理論の導入を行い実践すること。いずれも個性に応じた働き方を目指す実践指針だ。

ほどなく、ひかりのさとファームから少し離れた名鉄河和線「巽ヶ丘」駅の近くにある、障害者就業・生活支援センター『ワーク』職員の丹下靖さんが話の輪に加わった。

体験の幅を広げる スポット就労

ひかりのさとファームの取り組みの歴史と就労支援の基本的なコンセプトが生んだ支援スタイルがスポット就労である。

二〇〇〇（平成一二）年から取り組みが開始され、法人内の事業所、近隣の企



パン工房・びいぶる

業がその職場である。いわば施設外授産活動のひとつであるが、個々の利用者の支援計画に基づき、一般の職場へ送り出すというコンセプトを持っている。一日三〇分の人から、午前中あるいは午後一杯の勤務の人まで、「働き方」は多様だ。法人が運営する施設、宅配サービスの事業所、農産物販売のバックヤード作業、食料品製造など、職種や事業所も豊富である。平均工賃も時間給にすると二〇〇円から三〇〇円程度。ひかりのさとファーム全体の月額工賃は一万二五〇〇円から四万円台の人までさまざまだが、スポット就労が確実に工賃額をあげている。そのままパート就労へ移行した人もおり、時間給六九〇円で勤務している。

「まずは、やってみたいことの幅を広げたかった」と丹下さん。障害のある人

自ら選択する工夫

丹下さんの支援方法は、就労支援を幅広くとらえること、障害のある方が選ぶことが大切だと強調する。言い方を変えれば、良い意味で手あたり次第にあたってみることだという。

以前、丹下さんが支援した方は、施設の職員になりたいと思っていた。ハローワークに行くと、そのためにはいろいろな資格や学校での学習が必要なことを知

は、一般就労か作業所か、あるいは在宅か施設かで、二者択一の世界を余儀なくされてきた。施設というひとつの場で、有期であるならまだしも無期で過ごすということには違和感がないだろうか。もっと融通の効く働き方があつてよいはずだ。知的障害のある方は、自らチャンスを作るのが難しい。であるなら、新しい環境の中で、いろいろな経験をしていくことが大切である。そのためには、外の職場に送り出すことで、経験を増やすことが出発点ということだ。



「珈琲舎」での豆の選別作業



「QOL部・バクかめ」での機関紙の編集作業

る。やがて、美容院にも興味を持ったが、結局、パン屋と弁当屋を受験した。ある事業所で実習を受けることになったが、早朝からの実習にもかかわらず遅刻はしない。施設で働いていたころとは大きな違いだった。その理由は「自分で選んだから」。三〇件、四〇件の事業所に断られても選んでいく。その経験の中で「耐える力がつく」というのだ。

丹下さんは、障害のある子どもを持つ親に「自分のパンツは自分で選択してみろ」という例え話をよくするそうだ。親掛かりでなく、自ら選ぶことを強調することになっているという。選ぶ体験が、確かな力につながっていくという考え方を大切にしている。

同時に、職員の支援だけでなく、他の利用者による「ピア」の力も大きい。職



「バクかめ」取材する筆者

員の一〇〇回の声かけよりも、同じ施設の利用者の具体的な行動が気持ちを引き出すのだ。「バスに乗って、外の事業所へ働きに行く」というスポット就労の風景は、他の利用者にも具体的なモデルを示すという。そして、職員も利用者の動いた気持ちの的確につかむことが求められる。

スポット就労は、昨年度、今年度と一三名が取り組んでいる。一般就労への移行は、平均二名程度。必ずしも、スポット就労は、一般就労への移行をめざす橋渡しではない。体験を広げる中で、自分で考える。ひかりのさとファームのこだわりがここにある。

れすとらんくるみ

就労支援の仕組みの概要を理解したところで、昼食の時間。利用者の方の仕事ぶりを見ながら事務所と棟続きの「れすとらんくるみ」に向かう。

ケーナが奏でる優しい音色のBGMが流れている。新鮮な有機野菜の奏でる食のハーモニーとも相まって、豊かな昼食のひと時をかもし出す。秋の雨に濡れる田園風景も、その食味を一段と引き出してくれる。

ファームの利用者、大澤努さんはバックヤードで、食器洗いに専念している。もう一人の利用者、坂口香代子さんは食



堂の床掃除に余念がない。二人は裏方ではあるが、れすとらんくるみの味の引き立て役なのだ。レストランでは、既に予約で席が埋まっている。メインストリートからは目立つわけではないが、ひかりのりピーターに違いない。

QOL部 バクかめ

個性を生かした仕事を展開するQOL部は、福祉事業活動部門として位置づけられている。生産性を上げて高い工賃を求めめることも大事だが、じっくりと仕事に取り組むのが特徴だ。障害者自立支援法では、介護訓練かの二者択一が明確になっていく。そんな中で、自分が担う仕事を大切にしていって、その思いが木のぬくもりとともに伝わってくる。

バクかめは、名刺印刷やカレンダー、機関紙「かきどおし」の編集・発行などを行っている。身体障害のある利用者がその中心。「亀のように歩みはのろいが、バクのように夢を食べ続けていきたい」と、利用者の一人、松井タツ子さんがネーミングの由来を語ってくれた。



有限会社東和工業 (長坂浩司社長)

〒470-2105 愛知県知多郡
東浦町藤江字松本28-7
TEL 0562-83-3537
FAX 0562-83-8157

週2回(1日4時間)、スポット
就労する桑原浩幸さん



松井さんは、敷地内の福祉ホームに居住しながらバクかめに通う。もう一人のメンバー坂野笑美子さんとともに、施設見学者の案内役も仕事として担っている。坂野さんのデスクのパソコン画面には、二〇〇七年のカレンダーの凶案があった。

パン工房びびる

国産小麦、自家培養天然酵母を使った素朴で、とても味わい深いパンは、レーズンからとった酵母を素に生地を発酵させてつくられる。

生産は職員の手に委ねられるが、販売までの工程に利用者が関わる。店舗も構えるが、アクセスの問題もあり、販路の拡大につなげることが今後の課題だという。

自家焙煎コーヒー 苜舎

たけのこや

フェアトレード、すなわち生産者にとって利な貿易でなく、お互い公平な立場で輸入した生豆を自家焙煎する。生産者とのパートナーシップを大切にしている。障害のある人の問題にとどまらない、世界との連動を実感する。

利用者によって丁寧にハンドピック(手作業による選別作業)されたコーヒー豆は、磨かれた深い「こく」で、飲む



「鶏庵 陽だまり」担当の菅進さん。
生き物の世話に休みはない

人を魅了する。ひかりのさとのぞみの家身体障害者療護施設にパート就労する川口由景雄さんが、コーヒー豆に添えるチラシのイラスト部分を丁寧に色鉛筆で塗っている。聞けば、今日は勤務のない日で、ボランティアで来ているのだという。少しでもファームの役に立ちたいという気持ちで伝わってくる。川口さんをひきつける穏やかで、ゆったりと時間の流れる苜舎の雰囲気は格別だ。

養鶏部 鶏庵 陽だまり

けいあん ひ

れすとらん くるみの味わい深い卵焼きの供給源が、この鶏舎だ。昔ながらの平飼いで、生命力あふれる卵の源である。責任者の菅さんは、ここに来てから試行錯誤の連続だったという。幸い、飼料



「鶏庵 陽だまり」平飼いの
にわとりが産んだ卵みがき

屋さんの協力を得て、今に至っている。利用者が安定してくると、卵も安定する。鶏は決して敏感ではないが、人と鶏との関わりの中に何かがある。

卵を磨く生田久和さんは、「いい卵は、糞のついている割合が低く、そのぶん作業効率がよくなる」という。海岸で拾った貝がらを割り、資料に混ぜる作業をするのも利用者の皆さんの役割だ。

鶏舎に休みはない。「ここは、職員の職場ではなく、利用者にとって本当に自分の職場になるといい。夏休み、冬休みも、当番で出てきてくれる、本当に自分の職場になっていくのが嬉しい」と菅さん。一般就労して戻ってきた利用者に出会えると、「就職した後のケアがいかにか大切かと思う」とも言う。

このほか、QOL部として、竹炭作り、室内作業を行う「なんじゃもんじゃ」、陶芸や花植えなどの「からあ」など、ゆったりとした時間の中で、作業や活動と



編集委員の素顔 朝日雅也

埼玉県立大学保健医療福祉学部助教授。障害者職業カウンセラーとして現場での実践経験も持つ。現在の最大の関心事は、福祉施設と一般企業等での就労をいかに結び付けていくか。単に就労移行支援にとどまらず、障害のある人の尊厳ある働き方を追究していきたい。

「編集委員が行く」のデビューで、障害のある人の働くことの根本を振り返るフィールドに立てたことを感謝したい。



東和工業でワイパーの出荷準備をする神谷一弘さん

取り組む事業部も展開している。この後、実際にスポット就労が行われている現場を訪ねてみた。

スポット就労の意義

敷地内にある身体障害者療護施設のぞみの家は、入所定員五〇名の施設である。ここでも、ひかりのさとファームの利用者が、スポット就労している。作業内容は、食器の下膳、仮洗い、床掃除、タオルたたみなどだ。スポット就労を経て、パート就労に移った大木さんは、時給八〇〇円。テレビを購入したいとがんばっている。スポット就労の原さんも、ぜひ、ここで就職したいという。

施設長の湯浅修治さんは、スポット就労を受け入れることで、生産性以外にも労働の価値があることを実感したという。スポット就労は、利用者の体験を広げるだけでなく、受け入れる職場の意識も変えていくのだろう。

休まれては困る存在に

ひかりのさとファームから車で約一五分も行くと、自動車部品のワイパーの製造を行っている東和工業がある。ここに、パート社員として勤務する神谷一弘さんがある。見学の説明をしてくださった木村登志子さんは、「障害の有無ではなく、

仕事ができるかどうかが大事で、今では「休まれると困る存在」だと神谷さんの仕事ぶりを評価する。

ジョブコーチの鈴木慶子さんも、東浦町内にある社会福祉法人相和福祉会ひがしうらの家を卒業し、現在グループホームZZZZに居住の神谷さんの支援を経験した。鈴木さんの訪問に職場全体が和む。

神谷さんの時給は、時間六八八円の最低賃金以上で、一〇月からは時給六九四円の賃金になる。

神谷さんから少し離れた部署、大きなワイパーの部門で働く桑原浩幸さんは、ひかりのさとファームの「パン工房」が普段の職場だ。週に二回、午後の時間帯だけ、「スポット就労」で、東和工業で働いている。桑原さんの作業については、同事業所とひかりのさとファームと授産



身体障害者療護施設「ひかりのさと のぞみの家」のリネン室で働く大木祐都（まさふみ）さんと原ゆかりさん（写真左）

契約を結び、出来高払いをしている。時給換算で二〇〇円から三〇〇円は、桑原さんへ授産工賃として支払われ、パン工房よりも高い工賃となっている。桑原さんは、一時間に三〇本程度のワイパーの仕上げ処理をこなしていく。桑原さんは、グループホームからの通所者だが、同事業所へは、バスの定期券を利用できるので助かっているという。

多様な働き方を

ひかりのさとファームは、「施設から地域へ」を実現させるために、働くことを大切にしながら、スポット就労に代表されるように、外へ外へと向ける努力を続けている。でも、性急に一般就労への道を歩ませることはしない。大量の肥料で大輪の花を咲かせるより、自然の力を信じて、確実に就労支援の土壌を耕していきたいというのが、ひかりのさとファームの取り組みの共通項だ。そのコンセプトが、すべての事業の細部にしみわたっている。

障害のある人の就労支援を巡って、さまざまな課題が取り巻く現代。スポット就労がやがて、ひとつの連続性のある働き方として実を結ぶ日が来る。ファームを離れる帰路の車のバックミラー越しに、爽やかな風が吹き抜けるのが見えたような気がした。